

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19791762
 研究課題名（和文）
 ケアする人を支えるヘルスケア・アートプログラムの効果と地域ケアシステム
 研究課題名（英文）
 The effect and the community care system of the HealthCare Art Program to support the Caregivers
 研究代表者
 長谷川 珠代 (HASEGAWA TAMAYO)
 宮崎大学・医学部・講師
 研究者番号：30363584

研究成果の概要（和文）：

ケアする人々の健康増進を目的としたヘルスケア・アートプログラムは、楽しみが得られる場、交流の場等として認識され、『ケアする人』に専門職も含めた結果、ケアされる方や家族との一体感、気持の共有が図られた。このプログラムはケアする人々が感じる精神的・身体的な疲労感を解消でき、アートを活用することで精神面と身体面の双方への効果が得られ、心身の緊張緩和、意欲の向上に繋がることが示唆された。また NPO やボランティアと連携した実施により、地域ケアシステムとして稼働可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：

We had the Health Care Art Program for caregivers. This program uses the art for means of health promotion and improve of wills. The effects of program is that caregivers realized that program is their hearted places. They know the program as the rest times, enjoyment times and exchange times, so they expect to join the programs. In this research, we include many types of professions as caregivers, they join the program and create their art together. Through programs they also feel happiness, belonging, and identification. The Health Care Art Program dissolves their distresses, loads, anxieties, and many negative influences. Using the art, we can work on their pleasant mental effect and work on their physical effect. And the program makes good cooperation with many volunteers and NPO in the community. This program has possibility that work as health care system in the community.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	570,000	3,170,000

研究分野：地域看護学

科研費の分科・細目：(分科) 看護学 (細目) 地域・老年看護学

キーワード：ケアする人、ヘルスケア・アートプログラム、専門職者、ケア意欲向上

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

申請者は、日本の伝統的な文化を取り入れたヘルスケア・アートプログラムを作成し(以後H C A Pと略す)、平成17年度から在宅障害児と家族、ケアスタッフを対象に実践活動を展開していた。この活動を通して、ケアする人とケアされる人とがアートを通して楽しさを共有できることを確認してきた。ケアする人に対して、アートという非日常的な環境を提供することは、日常生活の中で経験するストレスから離れることにつながり、さらに創作を通して自己の解放が促され、他者との交流や一体感を感じることができる。そのことが日常の中で楽しみをもって生活することの促進につながることを確認してきた。国外におけるアートを用いたケアやケアする人に対するケアの現状として、オーストラリアではケアする人を支える組織団体が設立され、国が情報やプログラムを提供しながら、ケアする人たちの孤独感や無力感を解消し、生活の質の向上、すなわち生活の質の保証をしている状況がある。デンマークでは、看護・介護職者に対し『自分をケアする』という視点や方法を教育に取り入れ、それらは専門職としての必要不可欠な要素に位置づけられている。さらにアメリカでは、アートが様々な場面で活用されており、患者へのケアには勿論、医療従事者を中心とした専門職に対するケアにも活用され、研修の中にも取り入れられている。我が国の状況としては、2005年にアート・ミーツ・ケア学会が設立され、人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究し、アートの力を社会に活かしていくためのネットワークづくりを行っている。しかし、アートを用いたケアの対象に、患者や療養者の治療やケアにあたる専門職者を含めていないのが現状であった。申請者が行うH C A Pは在宅障害児や家族の中にケアスタッフも組み入れて実践しているが、アメリカのように医療従事者など専門職者を対象としたケアプログラムの開発と普及が必要と考えた。また、現在のH C A P活動の企画・運営は研究段階であり、大学が中心となって行っている。しかし、この活動をケアする人とケアされる人の日常に取り入れてもらうためには、プログラムを地域に根付かせ、実施主体を大学からN P O法人等に移行し、当事者の活動にしていく必要があると考えた。そのためには活動を継続し、その間に中心となって動くことのできる人材を育成すること、有効性を幅広く認識してもらうこと、さらには、活動の自主運営に向けた活動展開の試案づくりが必要と考えた。

超高齢社会を迎え、全ての人が誰かをケアし、ケアされる社会となっている現在、安心して地域で治療やケアを受けながら生活するためには、安定したケアが提供され続ける必要がある。そのためにも、様々な立場でケアをしている人が心にゆとりを持ってケアできる環境づくりが必要で、ケアする人たちをしっかりと支える地域ケアシステムづくりが必須であると考え、本研究を行った。

2. 研究の目的

H C A Pを活用した地域ケアシステム稼働の可能性評価を行うとともに、専門職者を含めたケアする人へのプログラム開発を目的とし、以下のことを明らかにする。

- (1) 専門職を含めたケアする人へのH C A Pを継続的に実施し、その有効性を明らかにする。
- (2) H C A Pのケアシステムへの定着を評価するための現状と課題を明らかにする。
- (3) ケアする人を支えている専門職者のストレス要因を明らかにする。
- (4) 専門職者を含めたケアする人に対するH C A Pを開発する。

3. 研究の方法

- (1) H C A Pの継続的な実施による効果とプログラムの開発と検討を行うため、各年1~2回H C A Pを定期的に開催した。
- (2) 専門職を含めたケアする人のニーズ調査および実態調査を実施した。
- (3) 国外活動の視察を行い、専門職を含めたケアする人に対するアートプログラム開発のための示唆を得た。視察地は先駆的に専門職へのケア、アートプログラムの活用を行っているアメリカとした。
- (4) H C A Pを用いた地域ケアシステムの稼働性を評価するため、地域で活動するN P O法人や有識者とともに意見交換等を行った。

4. 研究成果

研究の目的 (1) 専門職を含めたケアする人へのH C A P継続実施、プログラム開発・検討および有効性の検討 (4) 専門職者を含めたケアする人に対するH C A P開発に関しては、次の通り実践した。

2007年:

- ① 『めっちゃ楽しい福祉機器展示・試乗会』を共催し、地域で生活する障がい児・者や高齢者などをケアする家族や専門職者が、本人に合った福祉機器等の情報が得られるような機会を提供した。また、会場内では吹き矢de

ミニアートを開催した。これは主に子ども達を対象に行った企画であるが、ケアする人々がゆっくりと情報交換しながら過ごせることを目的に行った。

②K町保健センター職員を対象とした「吹き矢deアート」を実施した。

2008年：

①糖尿病キャンプにて、児童とボランティアを対象とした吹き矢deアートを開催した。

②地域で障がい児・者をケアする家族や専門職を対象に、グループワークを取り入れた、住みやすい社会にするためのニーズ調査を目的とした意見交換会を行った。同時に、福岡県で地域の特徴を活かした障がい児・者の社会福祉施設を運営している方を講師として招き、住みよい社会づくりに関する講演会を開催した。

2009年：

①障がい児療育キャンプにて児と親、ボランティアを対象としたキャンドルホルダーづくりを行い、廃材を利用し、参加者にとって夏や海の思い出づくりができる機会を提供した。同時に、完成したキャンドルホルダーに明りを灯しヒーリングミュージックをかけ、癒しの空間を演出した。

②訪問看護利用者と家族、訪問看護師やボランティアを対象としたイベントを、訪問看護師と一緒に企画し、運営した。ケアする人々自身の音楽演奏や、キャンドルサービスや花火など子どもから大人まで楽しめるイベントを行った。

これら様々なHCAPの開催を通して、専門職と家族など、様々な立場でケアをしている人々が共にアートを行い、一体感や楽しさ、爽快感などを共有することができた。家や施設内のような限られた空間ではなく、体育館や屋外など大きな空間を利用したプログラムを企画することで、非日常的な空間と時間などを過ごすことができると考える。プログラムを通して得た時間や内容、感じたことは、日常生活の中で刺激となり、活力となることが示唆された。また、家族や専門職と一緒に何かを経験することで、お互いの新しい一面を知る機会につながり、相互理解を促し、ケアにおける会話の増加などを生じ、ケアにおける人間関係の良好化、信頼関係の向上が期待できた。また、このようなプログラムは、ボランティアや支援者がいるからこそ開催できるものであり、それらはケアする人々と社会との接点、交流をうむ効果があることも示唆された。

専門職のようなケアする人々は、プログラムを通して知り得たケアの対象者情報などを

自分自身の活動に反映させたいと期待する傾向や新しい医療や福祉の情報を得たいと希望する傾向がみられた。先にも述べたが、家族やケア対象者の普段とは違う空間で、新しい一面をみることで会話が増えることや、遺書に活動をしながら日頃伝えたい思いを伝える機会にもなっていた。それは仕事における不安や緊張などを緩和することに繋がっていると考えられた。つまり、専門職を意識したプログラムでは、その時間や活動を「何かに活かすことができる」という視点が重要であること、ケアの対象や家族と交流することで人間関係や信頼関係の向上につながるような会場の一体化や体験の共有を意識したプログラムを提供していく必要性が示唆された。アメリカなどのような専門職のみを対象としたケアプログラムの効果や重要性もあるが、『ケアの対象者も、家族も、専門職も一緒に、同じ立場で楽しむ空間、時間が提供できること』を強化したプログラムを提供していくことがじゅうようで、これがヘルスケア・アートプログラムの特徴であり、強みであると考えられた。

研究目的 (2) HCAPのケアシステム定着に向けて現状と課題の明確化 (3) ケアする人を支えている専門職者のストレス要因の明確化に関しては、次のような成果が得られた。

2008年に障がい児・者をケアしている家族や専門職を対象として、「住みやすい地域社会にするために必要なもの」というテーマのグループワークを取り入れたニーズ調査を行った。その結果、ケアする人々は公共施設や道路等の整備などの社会環境、障害があることへの理解など人的環境等の整備を求めていること、ケアする人々自身への支援の必要性が示された。ケアする人自身への支援として健康増進や趣味や息抜きなど、ケアする人が自分自身の人生を実感できる時間や場所を提供することが重要であることが示され、HCAPは「生きがいを得られる場」として有効であることが示唆された。また、2009年にはケアする人の中でも、障害児・者を養育する母親のケア実態調査を行った。その結果、睡眠時間などが十分に取れていない、自分自身の時間を確保できていない、ケアに全ての時間を費やしていると感じている対象がいることが分かった。

継続的なHCAP実践を通して、開始当初は開催者からの参加の呼びかけや働きかけによって対象が得られている状況であったが、現在では、参加者の経年的増加と固定がみられ、ケアする人が行いたいことを伝えるなどなどプログラムの企画にも意欲が見られるよ

うになった。これは、本プログラムがケアする人々自身のために必要な『場』として認識され始めた結果であるといえる。またボランティアやNPOとの協力体制が構築されている。開催にあたっては、企画の段階からボランティアが一緒に入ってプログラム等の検討を行うようになった。また企画から関係者が参加することで、運営場面でも主体的な活動がみられるようになるなど、ケアする人々を取り巻く関係者間の役割分担ができつつある。また、このプログラムを通して築かれた連携体制はHCAP以外の場面でも発揮され、地域社会のなかで開催される、ボランティアを必要とする様々な場面で活かされている。このことから本プログラムが地域に定着し、地域ケアシステムとして稼働していくことができる可能性が示唆されたと考える。

今後の展望として、HCAPが地域ケアシステムとして円滑に稼働していくために、プログラムの継続実施と実施体制の強化を行っていきたくと考えている。継続実施に関しては、ケアする人々のニーズとして挙げられたように、より健康の維持・増進を意識したプログラムを企画していく必要がある。運動や体操とアートを組み合わせた内容を検討しており、健康運動指導士や理学療法士等の専門職と、書道や写真、絵画などの芸術活動を行っている方々からの意見をもらいながら、ヘルスケア・アートプログラムとして実践していきたい。また、実施体制の強化としては、実施回数と費用確保が課題としてある。実施回数に関しては、開催規模を検討し、様々な場所で開催できることや、回数を増やし多くの方が参加できる状況を整えていく必要がある。そのためには、企画・運営のできる人材の育成が重要であると考え、ボランティアの育成プログラムも検討していく必要がある。また、HCAP開催に伴って生じる費用について、負担なく継続していくために廃材等を利用するなどして費用軽減に努めること、必要経費を如何にして継続的に確保していくのか更に検討を重ねていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 件)

- 1) 長谷川珠代、「誰もが安心して暮らせる街づくり」のためにケアする人々が求める支援、南九州看護研究誌、査読有り、第8巻1号、2010、23-32
- 2) 長谷川珠代、アメリカにおけるケアする人の現状とアートをを用いたケア、南九州看護研究誌、査読有り、第8巻1号、2010、63-67

[学会発表] (計3件)

- 1) TamayoHasegawa, Quantitative Research on the Needs of Caregivers for the Disabled, The 2010 International Nursing Conference on Diversity and Dynamic in Nursing Science and Art, 2010. 4. 7-9, Phuket, Thailand
- 2) 長谷川珠代、ケアする人への継続的なヘルスケア・アートプログラム実施の意義、日本看護研究学会第12回九州・沖縄地方会学術集会、2007年11月10日、琉球大学医学部保健学科棟
- 3) 長谷川珠代、在宅療養児と家族へのヘルスケア・アートプログラムの効果、第8回子どもの療育環境研究発表会、2007年6月10日、あいち小児保健医療総合センター

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 珠代 (HASEGAWA TAMAYO)
宮崎大学・医学部・講師
研究者番号：30363584

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：